

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01998

研究課題名(和文) 功利主義と進化論の理論的・思想的関係についての研究

研究課題名(英文) On the Theoretical and Historical Relationship between Utilitarianism and the Theories of Evolution

研究代表者

児玉 聡 (Kodama, Satoshi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80372366

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「進化論は倫理に対してどのような含意を持つのか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者のこのテーマへの取り組みという観点から検討を行った。具体的には、J.S.ミルやシジウィックといった19世紀イギリスの古典的功利主義者たちが進化論を受け入れなかった理由に関する歴史的、理論的な研究を行うと同時に、現代の功利主義者であるP.シンガーが進化論をどれだけ正確に理解し、自らの規範理論に組み込んでいるかを検討した。以上の研究成果について国内外の研究者と意見交換、討議を繰り返し行った。また進化倫理学の概要を日本語の読者に伝えるため入門書の日本語訳を出版した。

研究成果の概要(英文)：This research project examined the implications of theories of evolution to ethics, mainly from the viewpoint of utilitarianism, which is one of the main theories in contemporary normative ethics. Specifically, it first explored the historical and theoretical reasons why the classical utilitarians in Britain in the 19th century such as J.S. Mill or Henry Sidgwick did not think that the theories of evolution has any implications to ethics. Second, it also examined P. Singer's understanding of the theories of evolution and how he connected them to his own normative theory. The results of this research are repeatedly discussed with researchers in Japan and foreign countries. Along with several published articles, it resulted in the publication of a Japanese translation of an introductory book on evolutionary ethics.

研究分野：倫理学

キーワード：進化論と倫理 功利主義 道徳心理学 規範理論

1. 研究開始当初の背景

進化論がわれわれのような影響を及ぼすかという問題は、内井惣七『進化論と倫理』(1996)で言及されているように、ダーウィンの時代から論じられてきた。しかし、現代であらたにこの問いが議論されるようになったのは、E.O.ウィルソンの著作に端を発する、社会生物学論争にある。ウィルソンは、当時の人間の性格形成が文化や教育によって決定されるという考えを批判し、遺伝の影響が大きいことを主張した。のちに進化心理学と呼ばれるこの分野の知見が深まるにつれ、進化心理学が人間の倫理のあり方が解明されるのみならず、倫理の方向性も決定するという考えが提唱された。現代の倫理学者、とりわけ功利主義者の中には、進化心理学によって倫理の正当化はできないものの、倫理的行動の一部を説明できると考える P.シンガーや J.グリーンらがいる。

このように見ると、功利主義と進化論は親和性が高いように見受けられるが、歴史的に見れば必ずしもそうではなかった。たとえば J.S.ミルは『論理学体系』の注の中で、ダーウィンの理論を科学理論であるとは認めていなかった (cf. D.L. Hull and M. Ruse, 1998)。また、ダーウィンが『人間の由来』を上梓した 1871 年の 3 年後に主著『倫理学の諸方法』を公表した功利主義者シジウィックも、進化論は倫理学に対してはいかなる含意もないとして、版を重ねても主著の中に進化論の話は一切入ることはなかった。20 世紀後半の功利主義者の R.M.ヘアも進化論の話は論じておらず、進化論が倫理学、とくに功利主義に対して持つ含意についての議論はシンガーが論じるまでほとんどなかったと言える。

とはいえ、シンガーやグリーンも、身近なものへの偏愛と功利主義が支持する普遍性のあいだの緊張関係を理論的に十分解決できるとはいえない。さらに、進化心理学の主張が正しいならば、現代社会の倫理的問題に対応できるように、道徳能力を遺伝学や薬理学などの方法でエンハンスすべきだとする J. Savulescu(2012)のような主張が、今後の倫理学が進むべき方向にどんな影響をあたえるか検討する必要がある。

2. 研究の目的

こうした背景を踏まえ、本研究では「進化論は倫理に対してどのような含意をもつか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者がどのようにこのテーマに取り組んできたか、という視点から検討を行う。ダーウィンと同時代人であった J.S.ミルやシジウィックらがダーウィンの進化論をどう評価したのか、および、進化論が倫理に対してどのような含意をもつかを詳細に検討する P.シンガーの議論を批判

的に検討する。

これらの検討を通じて、進化論および近年の脳科学や認知心理学を用いた道徳心理学の研究が規範理論に対して持つ含意を明らかにすることを目的とする。そして、こうした含意を明らかにすることで、哲学的知見と科学的知見とが、理論的にどのような関係にあるのかというより一般的な問いに対し、具体的な論点に基づく研究成果を例示することを目指す。また、本研究を通じて、これまで十分に明らかではなかった、功利主義と進化論との思想的なつながりおよび理論的關係が明らかになると思われ、それによって進化論と倫理の関係についても、佐倉(1997)のものを洗練させたいいくつかのモデルを提示することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、「進化論は倫理に対してどのような含意を持つのか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者がどのようにこのテーマに取り組んできたかという視点から、思想史および現代的関心に基づき、次の三つの小テーマに絞って検討を行った。

- (1) J.S.ミルやシジウィックといったいわゆる古典的功利主義者たちが、どのような理由から進化論を受け入れなかったのか。この検討により、進化論と功利主義についての歴史的なつながりを明らかにするだけでなく、近年の功利主義者たちが進化論の含意を受け入れるさいに見落している点がないかどうかを確認する。
- (2) シンガーの進化論理解と、彼が進化論や最近の認知心理学系の研究(霊長類や乳児の道徳性についての研究、行動経済学など)をどのように自らの規範理論に組み込んでいるか。この検討により、功利主義とこれらの経験科学を調停しようとするシンガーの試みが本当にうまく行っているかどうかを明らかにする。
- (3) シンガー、グリーン、内井ら現代の功利主義者による功利主義の基礎付けは妥当なものか。彼らはそれぞれ、進化論的知見は受け入れるが、事実と価値の峻別という観点から、進化論によって功利主義を正当化するということはしていない。そこで彼らがどのように規範理論としての功利主義をどのように正当化しているのか、またそれが成功しているのかについて明らかにする。

以上のテーマについて、基本的に文献研究という形で研究を進めた。ただし、進化論や心理学の正確な理解を必要とするため、進化

心理学や認知心理学を専門とする国内の研究者と適宜意見交換を行う。また、進化論と倫理、および進化論と功利主義について国内外の研究者と意見交換を行うことで、研究的確さを確保し、同時に国際的に高く評価される研究を実施した。

4. 研究成果

本研究では、進化論の倫理に対する含意に関する上記の3つの小テーマについて以下の通り検討した。

(1)「J.S.ミルやシジウィックといったいわゆる古典的功利主義者たちが、どのような理由から進化論を受け入れなかったか」という問いについて、先行研究および関連文献を網羅的にサーベイし、進化論と功利主義についての歴史のおよび理論的な関係について検討を行った。なお、関連文献の収集にあたっては、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受けた。これらの知見を基に、最終的な研究成果を、2017年度に国内の複数の学会において、J.S.ミルを中心とする進化倫理学を検討した成果を発表し、研究討議を行った。また、H.スペンサーの理論をあらためて検討し、進化論が我々に倫理指針を与えるという主張は進化論が倫理に対して持つ積極的な側面である旨、道徳感覚の生得性をめぐる倫理学上の論争に転機を与えた点を指摘した。

(2)については、まず Scott M. James, *An Introduction to Evolutionary Ethics* (2011)、内井惣七『進化論と倫理』(1996)など進化論と倫理に関する文献を精読し、この分野の現状および論点に関する正確な理解を得たうえで、進化心理学や認知心理学の専門的知識に関して、専門家との意見交換を行った。その上で進化論と倫理の関係について論じた P. シンガーの主要な著作 (Peter Singer, *The Expanding Circle* (1981), *A Darwinian Left* (2000), 'Ethics and Intuitions' (2005), *The Life You Can Save* (2009) など) および二次文献を精読して、シンガーの進化論理解の正確さ、直観主義を批判するためにどのように進化論を用いているか、また近年の認知心理学系の実証研究をどのように功利主義的な規範倫理に役立てているかなどを検討した。

(3) シンガーの著作に加え、J. Greene, *Moral Tribes* (2013) およびその書評や関連論文を読み、進化論によって倫理理論が正当化されない場合にどのような基礎付けが可能なのかについて、理論的検討を行った。この作業を通じて、進化論および近年の脳科学や認知心理学を用いた実証研究が規範理論に対して持つ含意について併せて検討した。この検討結果を、2015年度にエジンバラで

開催された国際生命倫学会にて意見を交換し、その後国際誌 (*The Tocqueville Review* vol.37) に共著論文を投稿した。また二次文献の収集にあたっては、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受けた。

上記の研究成果に加え、一般市民向けの活動の一環として、日本語の読者が進化心理学の概要を知る手がかりとなるよう、上述の James の書籍を日本語に翻訳し、『進化倫理学入門』(スコット・ジェームズ著、名古屋大学出版会、2018年)として出版した。また、近年のゲノム編集技術の発展においてもその「進化論的な含意」が問題になっていることを鑑みて、2015年12月に行われたゲノム編集国際サミット声明の日本語訳等を翻訳し、ウェブ上で公開することで、国内の倫理的議論の活性化の一助になるように努めた他、学会や国際ワークショップ等でも報告を行い、その内容の一部は論文として発表した。

<引用文献>

David L. Hull & Michael Ruse (eds.), London: Oxford University Press, *The Philosophy of Biology*, 1998

Ingmar Persson & Julian Savulescu, Oxford: Oxford University Press, *Unfit for the Future: The Need for Moral Enhancement*, 2012

佐倉統、角川書店、進化論の挑戦、1997

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7件)

児玉聡、ヒト胚へのゲノム編集--臨床利用の是非に関する論点整理、生命と倫理(上智大学生命倫理研究所)、査読無、5巻、2018、51-60

Nicol Dianne et al. (26名中20番目の著者)、Key challenges in bringing CRISPR-mediated somatic cell therapy into the clinic, *Genome Medicine*、査読有、9巻、2017、85

DOI: 10.1186/s13073-017-0475-4

田中美穂、児玉聡、人生の終わりを考える官民協働の取り組み--英国の Dying Matters、医療事故。紛争対応研究誌、査読有、10巻、2016、1-7

Hiroaki ITAI, Akira INOUE、Satoshi KODAMA, Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical

Utilitarianism、The Tocqueville Review/La Revue Tocqueville、査読有、37巻、2016、81-98

田中美穂、児玉 聡、川崎協同病院事件判決・決定に関する評尺の論点整理、生命倫理、26巻、査読有、2016、107-114

児玉 聡、法と倫理学、法と哲学、査読有、1巻、2015、83-91

Satoshi Kodama、Tsunami-tendenko and morality in disasters、Journal of Medical Ethics、査読有、41巻、2015、361-363

DOI:10.1136/medethics-2012-100813

Satoshi Kodama、Yumi Matsumura、Takahiro Hattori、Keiko Sato、Clinical Perspectives from Japan (Case Corner & Commentaries)、Asian Bioethics Review、査読無、7巻、2015、410-412

〔学会発表〕(計 7 件)

児玉 聡、スペンサーの進化論的倫理学の再検討、イギリス哲学会、2018

児玉 聡、進化倫理学の検討---ミルとスペンサー、京都哲学会、2017

児玉 聡、臨床利用の是非に関する論点整理、上智大学生命倫理研究所主催公開シンポジウム「人受精卵のゲノム編集」(招待講演)、2017

児玉 聡、ヒト胚へのゲノム編集技術：臨床応用の是非、生命倫理学会公募ワークショップ(招待講演)、2016

Satoshi Kodama、A Short Report of the End-of-life, Bristol-Kyoto Workshop on Ageing, Health & Ethics (招待講演)(国際学会)、2016

Satoshi Kodama、Miho Tanaka、Active and Passive Euthanasia in Japan: A Brief History、Medical Ethics in the UK and Japan: An Exploratory Workshop (招待講演)(国際学会)、2015

Satoshi Kodama、The Utilitarian Morality and the Normative Question、The 3rd Taiwan Metaphysics Colloquium (招待講演)(国際大学)、2015

〔図書〕(計 8 件)

児玉 聡、勁草書房、入門・倫理学(改訂版)、2018、312(3-25、177-193)

児玉 聡、弘文堂、科学知と人文知の接点、2017、368(255-270)

児玉 聡、ナカニシヤ出版、功利主義の逆

襲、2017、272(23-34)

児玉 聡、勁草書房、入門・医療倫理(改訂版)、2017、412(17-29、289-309)

児玉 聡、岩波書店、哲学トレーニング2、2016、203(150-158)

川上 憲人、橋本 英樹、近藤 尚己、児玉 聡ほか、東京大学出版会、社会と健康、2015、333(233-252)

大滝 雅之、宇野 重規、加藤 晋、児玉 聡ほか、東京大学出版会、社会科学における善と正義、2015、360(99-128)

赤林朗、児玉 聡ほか、勁草書房、入門・医療倫理 III、2015、322(11-24、115-119、265-285)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ
京都大学大学院文学研究科 応用倫理学・哲学教育研究センター 生命倫理プロジェクト
<http://www.cape.bun.kyoto-u.ac.jp/project/project02>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

児玉 聡 (KODAMA, Satoshi)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80372366

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし